
機動戦士ガンダムinfinity

大学 8 年生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダムinfinity

【Nコード】

N5969J

【作者名】

大学8年生

【あらすじ】

舞台は、遙か未来の廃れた地球と宇宙。戦争とも兵器とも何の関連もないただの少年が時代が織り成す、戦いのうねりに巻き込まれていく。自分が人を超えた力を持つ時、その刃を何処に向けるのか。

1、脅かされる日常（前書き）

こんにちは。今回が初投稿になります。大学8年生です。ただのガ
ンダム好きの小説ト素人ですが、よろしくお願い致します。

1、脅かされる日常

宇宙世紀と呼ばれる時代がありました。その時代の中で、人々はモビルスーツという機械を操って、何度も何度も戦争をしました。何万何億という命がこの宇宙に散って、そしてまた生き残った命から新たな時代を担うきらびやかな命が生まれ、この星、このコロニーを育んできました。

…そして、僕達が住んでいるのは、太陽系の地球という小さな星。嘗ては、最新鋭の技術で溢れかえっていて、それはもう今では考えられないような光景が広がっていたそうです。それも地球規模の大災害が起きてからは跡形もなく消え去りました。海底火山の噴火、まるで、地球の歴史にあったように恐竜が絶滅した原因そのものを人間は味わったのです。いくら技術が進歩した時代であっても、自然の猛威の前には無力に等しかったのです。宙に舞った火山灰は空を覆い隠して、太陽からの光を一切通さずに、氷河期のような時代でさえあったということです。ですが、それでも僕達人間は生き残りました。ただ死にたくないという気持ちだけで。

…自己紹介が遅れました。僕の名前は、コウキ・ヤマト、16歳です。僕は今、レミードという小さな海辺に出来た町で暮らしています。お父さんは商人をしていて、その仕事でいつも家を空けています。お母さんは僕が物心ついた頃には、この世には居ませんでした。お父さんからは病気で死んでしまったと聞いています。また、僕には兄弟がいらないから一人暮らしです。お父さんが送ってくれる仕送りと、僕が手伝っている知人のおじさんのお店からのバイト代でなんとか生活しています。今の地球の生活は驚く程不便になったようです。昔の地球の暮らしは、車だとか、飛行機だとか、あとモビルスーツという人型の巨大な兵器もあったと資料で読んだことはあり

ますが、今の僕達の暮らしにそんなものではありません。野菜は、畑で採れる物を食べるし、魚なんて自分で釣るのが当たり前。肉は近くのお店で買いますけどね。…何が言いたいかって、とにかく今と昔とじゃ生活が違うんです。普通時が経てば、人間の生活の水準は増していくのが普通なのに、地球のちよつとした気まぐれで一瞬でリセットです。

…ああ、でもそのモビルスーツという乗り物の事なんです、時々石炭の発掘現場などで、その腕だったり、頭だったり、足のような物が時折掘り起こされるようです。僕はまだこの目で見たことはないんですが、値段をつけたらそれはもう高価な物だそうで、お金持ちの人達が売買しているそうですよ。

「コウキ〜！早くしないと遅れるよ〜！！」

この元気よく僕の家のドアをノックするのは、幼馴染みのレミリア・マツカートニー。黒髪ショートヘアの元気のいい女の子。僕が働かせて貰っているおじさんの所の娘さん。毎朝こうして、僕の家まで迎えに来てくれます。

「今いくよ。」

僕はもう朝食も食べて、準備が出来ていたから、上着を取って駆け足で彼女の声の元へ飛んでいく。早くしないと、何されるかわかったもんじゃないんだ。この前寝坊した時なんか、僕の寝ている二階の寝室まで家の壁をよじ登って拳げ句の果てに窓ガラスを叩き割ろうとする始末。…確かに僕が寝ていたのが悪いんだけど、女の子なんだからもう少し大人しくして欲しいというのが本心です。

「おはよう。レミリア。」

朝一番、彼女の笑顔が僕の視界に飛び込んでくる。これを見れば、嫌でも一日が元気に過ごせるといふもの。

「おっはよー！！」

彼女のお店は、地元の漁師さん達がよく利用する飲食店です。彼女が僕を迎えに来てくれるのは、お店で使う材料を仕入れたその帰り道。今日も僕たちは他愛もない話をしながらお店に向かいます。

「そうそう！またモビルスーツのパーツがでたんだった！」

彼女はモビルスーツの話になると、いつも嬉しそうな顔をします。女の子なのに機械なんかに興味があるようです。

「また？最近よく見つかるね…。」

彼女とは反対に僕にはあまり興味はありません。これも聞いたただけの話ですけど、モビルスーツって戦争をするための兵器だそうじゃないですか。そんな物が掘り起こされるなんて、僕からしたら危ないかしくて、とても手に入れて喜べるような品物じゃない。

「この調子なら私達もいつかモビルスーツのパーツを生で見れる機会が来るかもねえー！！」

彼女の目が凄く輝いている。本当にモビルスーツなんて物を見つけたらどうする気だろう？…あ、いい忘れてたのですが、モビルスーツが出てくるのは何も地面だけじゃありません。湖や海の底に沈んでいたたりする物でもあるそうです。過去に、この町でもパーツが海から引き上げられたそうですよ。なんでも漁師さんの網に偶然引っ

かかってしまったんだとか…。その時は、他の遠い町からお金持ちの人が来てすぐ買い取って行ってしまったので、現物を拝む事はありませんでしたけど。

「じゃあ私先に倉庫に入れてくるからコウキは中に入ってて！」

お店の前についた途端に、レミリアは食材の入ったリヤカーを裏にある倉庫まで運んでいきました。女の子だけど僕よりは明らかに力持ちです。

「おう、コウキ。おはよう。」

「おはようございます。ベンさん。」

僕に挨拶したのは、このお店のオーナーのベン・マツカートニー。ベンだからベンさん、そのまんま。先程から僕がおじさんと言っているのはこの人のことです。凄くガタイがよくて、頭はスキンヘッドで口まわりの髭がよく似合う。初めて彼を見た人は口を揃えて怖いと言いますが、とても優しい人です。

「もうすぐ皆漁が終わって港から帰ってくるからな。頼むぞ。」

僕の頭を二回、軽く叩いてお店の前に置いてあったお酒を運び入れるベンさん。お酒といっても大きい樽に入ったワイン。僕じゃとても運ぶ処か、持ち上げる事だってできない。僕はさっさと、お店に入って、緑色のエプロンを絞めて、テーブルを拭きます。…こうしていつもと同じ一日が始まるうとしていました。

「いらつしゃい！」

「コウキ、こつちビールだ。」

いつもの通り、お店は漁を終えた漁師さん達で賑わいます。まだ夜とは言えない時間でも、お酒は必須。まるでジューズでも飲むように次々とジョッキやグラスが空になっていきます。僕は次々と注文された品を出して、空になってよう済みになった皿を片付けます。すると、誰かお店に入ってきました。

「いらつしゃ…。？」

僕は大方このお店にくるお客さんの顔は把握しています。こんな小さな田舎町だから顔の知らないお客さんがくる事は本当に極稀なんです。…なのですが、その顔も知らないお客さんが目の前にいました。それも男の一人と、女の人二人の計三人。

「な〜にい？この湿気た店。」

「きつたな〜い。しかもオヤジばつかじゃ〜ん。」

いきなりお店に入ってきたかと思いきや、女の人の方が、近くの席に座っていたおじさんを突然蹴り飛ばしたのです。

「邪魔くさいんだけど。座るから消えてくんない？」

蹴られたおじさんは訳もわからないと言った表情で床に尻餅をついていましたが、何をされたのかようやく理解して顔を真っ赤にして怒りだしました。

「このガキ…！なにしゃが…！？」

怒り狂ったおじさんが蹴り飛ばした女の人に殴りかかろうとした…まさにその時でした。

ドン…！！

…突如、銃声が店内に響きました。…よく見ると、三人の内の一人の男が懐から拳銃を取り出していました。

「う…！？あああ！？」

おじさんは太股を撃ち抜かれたようで、悲鳴に近い叫び声を上げながら床に倒れ込みます。

「うつ嘘だろ！？」

「正気かよ!？」

目の前の光景に驚き、殺されかねないという恐怖に刈られたお客さん達が、競いあうようにお店の外に流れ出ていきます。一瞬ですっからかんになった店内、そして、拳銃を放った男は最初に女の人人が座った同じテーブルに腰を下ろして、僕を見上げていました。

「おい小僧。この町に動かせるモビルスーツがあるだろ?…場所を教えてもらおうか。」

…動かせるモビルスーツ?何度も言うように僕は動かせるモビルスーツどころかそのパーツだって拝んだ事はないのに…。こういう場合は何と言えばいいのだろうか?下手な事を言えば僕まであの拳銃で撃たれかねない。

「知らねえ…なんて訳ねえよなあ?」

僕がどうしていいかわからないで、立ち往生していると、ベンさんが奥からジョッキに入ったビールを持って、此方に歩いてきました。そして、だまって謎の三人組が座っているテーブルにビールを置きます。男の人の目線が僕からビールに移りました。

「へえ…。気がきくじゃねえか。」

そして、ベンさんが持ってきたビールに男の人が手を伸ばした時でした。その瞬間、ベンさんの鍛え上げられた拳が男の人の首もとを直撃して、その身体を吹き飛ばしました。ゴム毯のように飛ばされた男の人は店の壁に勢いよく当たって床に膝をつきました。

「…グエ…ガハツ…!!」

男の人の口から血が何滴か落ちます。突然のベンさんの行動に呆気に取られていた女の人達は慌てて、吹き飛ばされた男の人に駆け寄ります。

「あ…アンタ！自分で何したかわかってるんでしょうね!？」

ベンさんは無言で腕を組んで三人組の前に立ちはだかります。

「…知らねえな。そんな豆鉄砲持つてくるくらいで人様の上に立てると思うなよクソガキども。」

いつもの優しいベンさんはそこにはいませんでした。普通なら言葉も出せなくなるような威圧感なのに、しかし殴られた男の人の口元が笑っていました。そして、拳銃を取り出した反対側のポケットから無線機のような物を取り出しました。そして、そのボタンを押すと、ベンさんと僕を見ていました。

「決めたよ…。モビルスーツ探しの前にこの汚ねえ店から踏み潰してやるよ。」

…男の人がそう言い終えた瞬間、海とは反対側の山の方から土砂崩れのような音がしました。驚いた僕は、店の外に駆け出して、音のした方角を見ます。すると、山の斜面に二十メートルはあろうかという緑色の鉄の巨人が立っていました。

「こんな豚小屋みたいな店…。俺のザクで踏み潰してやるよ…!!
ハハハハハ!!」

男の人の笑い声に反応するように、山から現れたザクは大きくジャンプして山の麓^{ふもと}まで一気に降りてきました。そして、不気味に光る赤いひとつ目がこちらを向いてゆっくりと大きな足音を立てながら、こちらに向かつてきます。町の人達は見たことのないモビルスーツの突然の登場に混乱し、慌てて逃げ回っています。僕も逃げ出した。気持ちで一杯でした。男の人達の三人組は、立ち上がると、こちらに向かつてくるザクに向かつて走り出しました。どうやら乗り込むつもりようです。

「ベンさん！！どうするんですか！？」

同じく、店の前に出て迫り来る鉄の巨人を見上げていたベンさんに駆け寄ります。ベンさんは僕の方を向かないで、ザクを見たまま言いました。

「コウキ。レミリアを連れて此处から離れろ。」

「！？ベンさんはどうするんです！？」

ベンさんは何も言わずに、僕に小さな鍵を手渡しました。

「お前の親父から渡されていたもんだ。一人前になったら渡してくれって事だったんだが…、今のお前なら一人前って言っても親父は頷くだろうよ。」

…気がつくと僕は走り出していました。本当ならベンさんと一緒に逃げたかった、そうしなければならなかったのに。僕はお店の厨房に走り込むと、端の方で踞り、動けないでいるレミリアを見つけました。

「レミリア！ここは危ないんだ！逃げよう！！」

僕は恐怖で動けないレミリアを抱き上げて、とにかく、一直線に自宅への道を駆け出しました。レミリアは僕の腕の中で震えながら言いました。

「…あんなに怖い物だったなんて…、私…知らなかった…！お父さん…！」

僕達は一生懸命に逃げているけど、それでもあのザクというモビルスーツの足音は此処まで響いてきます。それは恐怖以外の何物でもありませんでした。僕はその足音から逃げるようにレミリアを抱えたまま、とにかく走りしました。

家につくと、レミリアを取りあえず近くのソファに座らせて、僕は一階の人一人入れる程の大きさの金庫に駆け寄りました。さっき、ベンさんから貰った鍵、そして僕がこの家で掛かっている鍵で一度

も開けた事がないのが今目の前にある金庫でした。何の確証もありませんでしたが、僕は夢中で鍵を金庫の鍵穴に差し込みます。すると、滑り込むように鍵は鍵穴に吸い込まれて、殆ど力を加えずとも簡単に回りました。何が出てくるのか予想もつきませんでした。とにかく、鍵の外れた扉を抉じ開けます。

「え……？」

僕の視界に飛び込んで来たのは地下に続いていると思われる階段でした。薄暗く、不気味な感触に襲われましたが、それでも今は考えている余裕なんてありません。僕はその暗闇に飲み込まれるように階段をかけ降りました。途中、足元が見えず、つまづいて残りの階段を一気に転げ落ちました。

「いつ！？だつ！？あがつ！？」

冷たい広い床に叩きつけられて、体のあちこちが痛みます。取り敢えず、広い所に出たようなので手探りで明かりになるようなものを探します。すると、照明スイッチのような物に僕の手が当たって、目の前を天井の蛍光灯が照らし出しました。

「……嘘……だろ？」

僕の目の前にいたのは、仰向けに倒れていた、見たことも聞いたこともない白いモビルスーツでした。

1、脅かされる日常（後書き）

とっても有りがちな始まりになってしまったと思いますが、面白く出来るようにこれからも頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5969j/>

機動戦士ガンダムinfinity

2010年10月13日18時29分発行